

『今月の天候と農作業』

通巻第5583号
9月号
平成27年 8月 27日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【九州南部1か月予報】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

【予報のポイント】

期間の前半を中心に低気圧や前線の影響を受けやすく、向こう1か月の気温は平年並か低く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	40	40	30
降水量	九州南部	20	40	40
日照時間	九州南部	40	40	20

【概要】

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または低い確率ともに40%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、低い確率60%です。2週目は、平年並または低い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

。<1週目の予報> 8月29日(土)～9月4日(金)

前線や湿った気流の影響で曇りや雨の日が多いでしょう。

※明日から1週間の、費別の天気や気温などは、

週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2週目の予報> 9月5日(土)～9月11日(金)

では、低気圧や前線の影響で平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<3週目から4週目の予報> 9月12日(土)～9月25日(金)

高気圧に覆われ、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆ 普通期水稻

1 病害虫防除

「穂いもち」は葉色の濃い所では被害が大きくなりやすいので、防除は出穂前と穂揃期頃に必ず行います。「カメムシ」は穂揃期とその7～10日後の2回は基本です。「トビイロウンカ」は、株元で増えるので、ほ場毎によく観察します。

2 水管理

根の活力を維持し、玄米の登熟を良くするため収穫の5日前迄、間断かん水を続けます。この間は落水時でも土が乾くことがないように湿潤状態を保ちます。台風時は深水で倒伏軽減を図り、台風通過後も吹き返しの高温・乾燥風により玄米の品質低下が起こる場合もあるので、風が止むまでは水を保ちます。倒伏した場合に、籾が水面に接すると発芽しやすいので、穂先を隣の株の上に乗せるなどします。

◆ 大豆

湿害防止のため、ほ場周囲や畦間の排水溝を整備します。開花期以降は「紫斑病」や「カメムシ」の防除を行います。「ハスモンヨトウ」は老齡幼虫になると薬剤の防除効果も劣るので、観察に努め、早めに防除を行います。特に孵化後間もない幼虫が食害した際に発生する白く透けた葉を見つけたら、幼虫が周囲に広がる前に摘み取り処分することも効果的です。

◆ そば

1 排水対策

そばは湿害には弱く、長時間滞水や冠水すると生育不良や立枯れが発生するので、排水溝を設け生育期間中も、排水を徹底します。

(鎌田 博人)

施設野菜

◆ 共通事項

施設野菜ではきゅうりを始め、ピーマン、トマト、いちごなどの定植が始まります。育苗期の後半は、鉢ずらしを行い、がっちりした苗に仕上げます。鉢ずらし後は乾燥しやすいので、かん水不足に注意します。

また、これらの苗は適期に定植することが重要です。台風や降雨の多い時期となるため、ハウスの定植準備は計画的に余裕をもって行います。

定植前のかん水は、定植の5～7日前にかん水チューブを利用し、畦全体が湿るように十分行います。定植前には根が深く伸長するよう植え穴に十分かん水を行い、定植後は活着促進を図るため株元を中心にかん水することが重要となります。なお、定植前のかん水量が不足していると根張りが不十分となり生育や収量に大きく影響しますので、中期展張ハウス等の周年ビニルが被覆されているほ場では注意が必要となります。

◆ きゅうり

ハウス抑制栽培の定植期となりますが、定植後から収穫開始期までの管理により草姿は決まります。根を十分に張らせコンパクトな草姿に上げることが、収量、品質向上につながりますので、定植後は株元中心の手かん水を行い、活着後はかん水を控えて徒長しないよう草勢の調節を行います。また、定植の早いものは、主枝の摘心期となりますが、摘心1週間前には1回目の追肥を行い、初期の草勢維持を図ります。

◆ ピーマン

接木栽培のピーマンは、自根栽培に比べて草勢がやや弱くなる傾向がありますので、通常（12ポット苗）よりも2週間程度早めに定植を行います。かん水についても定植後から収穫開始時期までかん水量を3～4割増やすなど草勢を強めに保つことが必要となります。

◆ トマト

促成栽培の大玉トマト、ミニトマトの定植期となりますが、セル苗を2次育苗せず直接定植するダイレクトセル苗定植が増えてきています。異常茎（メガネ）の発生を抑制するため、定植後にかん水量を制限する管理が行われていますが、極端な水切りは初期生育に悪い影響を及ぼしますので、少な

めのかん水量で回数を多く施用するようにします。

◆ いちご

さがほのかは、花芽分化に対する窒素濃度や苗令の影響が少なく、花芽分化が揃って早いのが特徴です。

ポット苗の花芽分化期は9月10日頃であるので、その2～3日前から顕鏡を行います。花芽の確認後、9月中旬以降に定植します。

なお、定植は採苗が早く育苗期間の長い苗から順番に行い、炭疽病等の恐れのある苗は除去します。

(黒木 正晶)

葉茎根菜類・いも類

9月はキャベツ、はくさいの定植やほうれんそう、だいこん、水田ごぼう、にんじんなどの播種期となります。水はけの良い、地力の高いほ場を選び、植え付け時に適度なかん水を行い初期生育を促すことが重要です。

生育初期にネキリムシ等の被害を受けやすく、チョウ目害虫や甲虫類の食害や雑草の発生も多いので防除対策は重要です。

◆ にんじん

8月播種したものは間引きの時期を迎えます。株間は8割程度を目安に年内出荷はやや広めに、年明け出荷はやや狭くして有効株数を確保し収量アップを図ります。干ばつによる発芽不良や大雨による土壌や種子の流失で欠株が多い場合は、まき直しを行います。地域によりやや差はありますが遅くても9月20日頃までが播種期の限界となります。

◆ ほうれんそう

加工用のほうれんそうは下旬より播種適期となります。大柄に生育させるためには、排水の良い、肥沃なほ場を選定します。土壌酸度は石灰資材を施用してpH7を目標に調整します。播種後除草剤を処理しますが、土壌が乾燥しすぎて除草剤の効果が劣る場合が見られるので、播種前に適度なかん水を行い、適湿の状態除草剤を散布します。

◆ 食用かんしょ

普通掘りの収穫期です。生育日数が130日以上になると、いもの形や皮色が悪くなります。チョウ目幼虫（ハスモンヨトウ、ナカジロシタバ等）が多発しやすいので、収穫予定日を考慮しながら、若齢幼虫期を逃さず農薬防除を行います。

(杉村 幸代)

果樹

1 常緑果樹

◆ 温州みかん

極早生温州みかんの収穫が始まります。収穫は樹上選果を行いながら、着色や果汁成分など、地域の基準に基づいた出荷を行きましょう。

収穫が早い園では、秋期の高温の影響で、収穫後に秋枝が発生し、翌年の着花に悪影響を及ぼす事があります。9月中旬までに収穫を終える園地では、10月以降、秋枝が発芽しなくなった時点でマルチの除去やかん水などを実施しましょう。

◆ 完熟きんかん

今年は、6月下旬の花がわずかに結実し、その後は7月下旬と8月の花が結実している園が多く見られます。結実が遅く果実肥大が遅れている園地では、9月下旬から10月上旬にビニル被覆を行い、昼間の高温管理と夜間の加温（外気温よりも3度程度高い温度）により、肥大を確保しましょう。

◆ マンゴー

今年は収穫の遅れや日照不足により、剪定後の生育が遅れています。枝の緑化の遅れは、花芽分化や収量に悪影響を及ぼします。葉面散布で早期緑化を図りましょう。剪定の遅れた園では、剪定直後から夜間の加温や早朝及び夕方の保温を行い、新梢の発生、緑化を促進しましょう

9月になると、日射量は真夏よりも大幅に少なくなります。内カーテンや遮光カーテンを開放し、十分な日照を確保しましょう。

2 落葉果樹

◆ くり

ほとんどの品種が収穫時期を迎えます。

収穫・出荷に当たっては、早朝に収穫することで、品温を低く保ち鮮度保持を図りましょう。また、家庭選別を徹底し、実炭そ病や果実害虫の被害果の混入を防止しましょう。

(山口 和典)

花き

◆ 秋ギク

「神馬66-4」の10月出荷作型の再電照は総苞りん片形成後期から4日間実施します。目安として消灯後12～14日後ですが、地域や当年の気候で花芽発達のスピードに変動がありますので、農業改良普及センターまたはJAにおいて「花芽分化の検鏡」を必ず行った上で実施してください。

直挿しする穂は、低温伸長性を高め、節間伸長や生育の揃いを良くするために2～4度で穂冷蔵を行います。「神馬」系統は穂冷蔵を長期間実施すると、直挿し後の腐敗が多発したり、開花遅延が発生しますので、冷蔵期間は3週間程度に留めましょう。

「神馬66-4」は、高温の影響を受けると従来の「神馬系統」よりも腋芽が出にくい特性があります。9月以降も残暑が続きますので、必要に応じてBA剤の散布を行うとともに、親株ほ場はできるだけ涼しくなるよう管理してください。

◆ スイートピー

冷蔵が終了した種子は、活着不良を避けるために遅くとも出庫後3日までは植え付けましょう。また植え付けから1週間は、乾燥しないように綿密な水管理を行い、その後は徐々にかん水間隔を広げて根の張りを良くしてください。1ヶ月程度は、ベッド全体が十分湿るようなかん水を行ってください。

植え付け時期の遮光は植え付け前から実施し、植え付け後7～10日は寒冷紗で終日遮光し、その後は天候に応じた遮光を行ってください。長期の遮光は軟弱徒長となりますので、生育を見ながら除去します。

◆ デルフィニウム

沿海地域の年内出荷作型の定植期になります。早期抽だいを防ぐために定植前に寒冷紗等で遮光すると共に十分にかん水を行ってください。

中山間地域で8月上、中旬に定植した作型では抽だいから発蕾時期になります。抽だい後2週間ぐらいまでは硝酸カルシウム等の液肥を定期的に施用し、株の充実と茎の硬化を図ります。

◆ キイチゴ

気温の低下とともに腋芽や新しい枝の伸長が盛んになります。また、ハスモンヨトウ等のチョウ目害虫の発生が増えますので、定期的な防除を行い、出荷量を確保します。

また、この時期に立っている枝はすべて収穫せず、一部は来年度に向けた株養成のための枝として残します。

◆ ホオズキ

白絹病やその他の立ち枯れ病、ウイルスが発生したほ場では、出来る限り残渣をほ場外に持ち出して焼却し、ほ場に残った細かな残渣については、残渣分解資材を散布し、気温が高いうちに耕うんの繰り返しと適湿な土壌水分管理で十分な腐熟を行いましょう。

(中村 広)

畜産

◆ 家畜

今月は夏から秋に変わる季節の変わり目で、気温の日格差が大きくなる時期です。また、台風の襲来も予想されるため、十分な対策が必要となります。さらに、暑熱の影響による受胎成績の低下も、この時期にでることから、暑さで体力の落ちた家畜の回復を図るようにしましょう。昼は畜舎への風の通りを良くするとともに、換気扇や細霧装置を動かし、暑さ対策を行いますが、夜間は急に気温が下がるので、気温差で家畜が体調を崩さないように、温度管理を十分にに行いましょう。

乳牛に関しては、ヒートストレスメーターの温湿度指数（THI）を毎日チェックし、THI値が67以上の場合は、牛舎ファンを常に回し、牛体に

風が当たるよう暑熱対策をしっかりと行います。夜間はT H I 値をチェックしながら対策を行きましょう。また、水については、新鮮な水を飲めるようにしてください。

豚では、夏期の暑熱による受胎率の低下がみられる時期になりますので、交配期の豚の体調管理と観察を徹底し、受胎成績の改善を図りましょう。また、気温の日格差が広がる季節は、豚や鶏の病気が発生しやすい時期ですので、観察を徹底して疾病の早期発見に努め、早めの対策を行きましょう。

◆ 飼料作物

今年は6月～7月の日照不足の影響により、トウモロコシなどの夏作飼料作物の収穫量が大きく減収しています。

このことから、トウモロコシ、ソルゴー、飼料用稲など秋に収穫する飼料作物の収量確保が非常に重要となっています。なお、台風の襲来が危惧されますが、天候にあわせた収穫作業を行い、良質粗飼料の確保に努めましょう。また、年内収穫のエン麦の作付け時期にもなりますので、計画的な作付け作業を行きましょう。

(三角 久志)

特用作物

◆ 茶

これからの作業は、来年の一番茶収量や品質の確保に大変重要となります。こまめに茶園を巡回し、適切な管理に努めましょう。

1 秋肥の施用と土づくり

秋肥の施用時期が遅れると耐寒性が低下し、秋冬期の急激な低温により寒害(幹割れ・越冬芽の凍害等)を受けやすくなります。必ず、9月上旬までには秋肥を施用しましょう。また、土壌が固く根量が少ない茶園では、9月上旬までに10㎡当たり堆肥1～2トンを施用し軽く耕耘を行きましょう。更に、今年中切り更新した茶園を除き計画的な深耕を行うと、発根が促進され肥効率向上にもつながります。

2 病害虫の防除

秋芽が硬化していない茶園では、連続した降雨等により葉の濡れ時間が長くなると炭疽病やもち病が多発します。一葉期頃に予防効果の高い薬剤を、三葉期頃に治療効果の高い薬剤を散布します。秋期に多発するチャノミドリ

ヒメヨコバイやチャノキイロアザミウマ、カンザワハダニ等の吸汁性害虫やハマキムシ類も、茶園を観察し適期防除に努めましょう。

県内の茶園でもチャトゲコナジラミの発生が確認されています。この害虫は、成虫が茶園を飛び回りますので、茶園を良く観察しましょう。なお、本虫に対する問い合わせや、見慣れない虫を発見した場合には、最寄りの農業改良普及センター等関係機関へ連絡をお願いします。

(黒木 清人)

◆ しいたけ

1 原基(げんき)づくり

9月から10月は、しいたけのもととなる原基の形成が盛んな時期で、今後のしいたけ発生量に大きく影響します。原基の形成促進のため、光の確保に加え、十分に散水を行いましょ。特に古ほだ木は、天地返しやほだ回しを併せて行うとより効果的です。

2 ほだ場の準備

秋以降のほだ起こしに備えて、ほだ場の選定と整理が必要です。ほだ場には、南～東南斜面の日光がチラチラ差し込む林内や、風当たりが弱く比較的湿気が多いところなどが適しています。スギやヒノキ林のほだ場では、間伐や枝打ちを行い、光や降雨の入りやすい環境にしましょう。また、従来からのほだ場を使用する場合は、害菌による被害木や古ほだ木を撤去しましょう。

(吉行 浩太郎)

◆ たばこ

今月の作業は、通常期販売に向けての出荷規格の確認と来年作に向けた準備が主な作業となります。

- 1 出荷前には必ず最終確認として、異物・異臭・水分の確認と土砂付着や腐れ等の手入不足がないか出荷箱の確認を行いましょ。また、普通系に色損系（グレー葉・汚れ葉等）が混入していないかの確認もあわせて行い、混入している場合は、ピッキングを行いましょ。貯蔵害虫については、成虫や食害痕、排泄物がないか確認を行いましょ。発生を確認した場合は、速やかに耕作組合へ連絡し、適切な処置を行ってください。

確認作業は、晴天日に行い、吸湿による品質低下に注意しましょ。

- 2 病害の耕種的防除の徹底を図る為にも夏期深耕を3回以上行い立枯病等、土壌中の病原菌密度低減や土作りに努めましょ。

3 良質堆肥10㎡当1200kg以上の使用へ向けて、堆肥の材料を十分に確保しましょう。また、未熟堆肥投入を避けるためにも定期的に切返しを行い、腐熟促進を図りましょう。

(宮崎県たばこ耕作組合)

内容の詳細について

9月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1ヶ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
普通期水稻	穂いもち ※※ 紋枯病	やや多 やや少	葉いもちの発生状況は、発生面積率・程度ともに平年よりやや多く、8/3に注意報を発表しています。 穂ばらみ期以降は稲体の抵抗性が弱まり、紋枯病が上位葉鞘へ進展しやすいので、発生程度の高いほ場は注意が必要です。
	トビイロウカ (秋ウカ) 斑点米カメムシ類	やや少 やや少	現時点ではトビイロウカの生息数は少ないものの、今後の天候次第では増殖率が高まるのが予想されるため定期的にほ場を観察するなどし、現在低密度のほ場でも注意します。 斑点米カメムシ類は、穂揃期とその7~10日後の2回防除が基本です。残存虫が多い場合は収穫前使用日数等に注意して追加防除します。
大豆及び野菜類	ハモシヨトウ等チョウ目 (鱗翅目)害虫	やや多	中齢以降の幼虫に対しては薬剤が効きにくくなりますので、早期発見に努め若齢幼虫期に防除します。施設栽培では施設開口部に防虫ネットを設置し、成虫の飛来を防止します。
施設果菜類	ウイルス媒介虫 (アブラムシ類、アザミウマ類等)	—	ウイルス病は生育初期に感染すると大きな被害をもたらします。アブラムシ類やアザミウマ類などは種々のウイルス病を媒介しますので、施設開口部への防虫ネット設置や定植時の粒剤施用などの防除を徹底します。
	タバココナジラミ類	—	県内ほぼ全域で、各種薬剤に対して感受性の低い(薬剤の効きにくい)バリエイタイプQが、優先して発生していることが確認されています。薬剤のみでは防除が困難ですので、防虫ネットや粘着板等を組み合わせた総合的な防除対策に努めます。
	キュウリ黄化えそ病 (MYSV)	—	メキイロアザミウマによって媒介されるキュウリ黄化えそ病(MYSV)が、一部地域で確認され、拡大していることから注意が必要です。
促成いちご	炭疽病 ※	—	罹病苗の持ち込みは、本ほ内での感染源となるため健全苗のみ定植します。苗床で発病した苗に隣接している苗(半径3ポット程度)は、感染苗と見なし廃棄します。苗からの持ち込みによる病害の発生が見られるので、定植前に防除を徹底します。
果樹全般	果樹カメムシ類 ※	—	チャバ初カメムシの発生が多くなり7/27に防除情報を発表しています。カメムシのえさとなるヒメキ球果の着生量が少なく、ヒメキに定着できなかった越冬世代成虫が長期にわたって移動を繰り返していたものと推察されます。 温州みかんでは、着色期の加害は落果を生じやすいので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。
カンキツ類 (露地栽培)	かいよう病 ※	並 やや多	かいよう病は、台風等による枝葉の損傷等により発病が助長されます。薬剤は、事後より事前に予防的に散布する方が効果的です。 黒点病の発生が多くなっており7/27に防除情報を発表しています。降水量が少なくても1ヶ月毎の防除を実施します。
	シハダニ チャノキイロアザミウマ	並 並	シハダニは、平年並の発生です。寄生葉率30%または1葉あたり虫数0.5~1頭の発生初期に防除を行います。
茶	炭疽病 もち病 輪斑病 ※	やや少 並 やや多	炭疽病は、秋芽の生育期に降雨が続く場合には、生育初期から7日間隔で2~3回防除します。もち病は、中山間地での発生を確認しています。 輪斑病は新梢枯死症の原因となりますので、輪斑病の多発ほ場では秋芽の萌芽期~2葉期に防除を行います。
	カンザリハダニ チャノコクモシ チャハマキ チャノボカ チャノキイロアザミウマ チャノミドリヒメコハ クワシロカイガラムシ チャトゲコナジラミ	やや多 並 並 やや多 やや多 やや少 —	カンザリハダニは、低密度での防除に努めるとともに、薬剤感受性の低下を避けるため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用します。 チャノボカは例年9月以降に増加し、また、この時期は秋芽の伸長期であるので、今後の発生に注意します。 チャノキイロアザミウマのこの時期の発生は、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には農薬がかかりにくく防除効果があがらないので、残効性の長い農薬か1週間間隔での連続散布を行います。 県西部におけるチャトゲコナジラミの防除適期は8月下旬~9月上旬と予想されます。
<p>1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。 2) ※※は注意報、※は防除情報を発表中です。詳しくはホームページをご覧ください。病害虫防除・肥料検査センターホームページアドレスは、http://www.jpnp.ne.jp/miyazakiです。</p>			